

働き続ける道 見えなかった

働き盛りの世代が家族の介護をするケースが増えている。仕事と介護の両立は困難に伴い、毎年約10万人が介護のため仕事を辞めている。一方、様々な支援や工夫で乗り切る人も。仕事と介護の現状と、両立に向けた取り組みを2回にわたって考える。

「会社を辞めて本当によかったのか。ほかに選択肢があれば、辞めずに済んだのかも知れない」

さいたま市の元会社員、神谷之雄さん(56)は、自分の決断が正しかったのか、今も結論が出ていない。

昨年3月末、妻のよし子さん(56)の介護に専念するため、大手運送会社を退職した。妻は神経難病で認知症の症状もあり、介護保険では要介護3とされている。退職で収入が途絶え、妻の障害年金や同居する社員の娘2人からの援助、これまでの貯金で生活している。

妻の異変に気づいたのは2015年9月頃。ショッピングセンターのエスカレーターの前で妻が突然、足

を止めた。「怖くなったやつ」とつぶやいた。

冷蔵庫の扉や水道の蛇口が開けっ放しのこともあり、心配で病院に行くも、認知症と診断された。診断の翌日、職場の上司に報告しながら涙があふれてきた。

早く帰れるように出勤時間を午前6時半に始めてもらった。ケアマネジャーと相談し、週1回のデイサービスと、訪問リハビリを利用することにした。

帰宅すると、妻は真っ暗

妻のよし子さん(左)の食事を介助する神谷さん(さいたま市で)



妻は要介護3 誰にも相談せず退職

なりピンクでソファに腰掛けていた。着替えや入浴も手助けが必要で、妻の代わりに慣れない料理や洗濯に追われた。

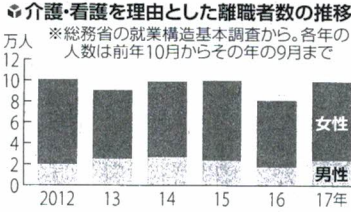
職場では、貴重品の輸送警備業務の責任者。しかし、日々状態が悪くなる妻を見

て、「仕事を辞めて、妻の面倒を見た方がいいのでは」と思うようになった。

「仕事でも通勤の途中も、妻が気になった。」「ご飯食

介護しながら就労 36万人

総務省が5年ごとに公表する就業構造基本調査によ



ると、介護をしながら働く人は2012年に29.1万人(仕事を持つ人の4.5%)だったが、17年には34.6万3000人(同5.2%)に増えた。

一方、家族の介護や看護が理由で離職した人は17年に9万9000人。12年の10万1000人とほぼ横ばいだった。介護離職者のうち計55%が、40歳代と50歳代の働き盛り世代だった。

みずほ情報総研が、元正社員に行った調査(16年)で

ず、退職を決意した。

退職から3か月後、少しでも収入を得ようと、自宅近くのデイサービスで送迎車を運転するアルバイトを始めた。妻のデイサービスを週5日に増やし、不在の時間に毎日6時間働いた。

しかし、体力が続かなかった。毎晩、妻が何度もトイレに起きるため、睡眠不足になった。妻に「少し我慢してよ」「俺は休めないのか」と強くあたっては後悔を繰り返した。今年5月、アルバイトを辞めた。

ケアマネジャーから「奥さんと距離を置いたほうが

は48%が辞める前に「誰にも相談しなかった」と回答。職場の上司や人事部に相談したのは24%、「親族」は13%、「ケアマネジャー」は11%だった。

就労の継続が難しかった理由(複数回答)は「体力的に両立が困難」(40%)が最多。「介護は先が読めず、自立の見通しが困難」(32%)、「自分以外に家族で介護を担う人がいなかった」(29%)が続いた。

介護離職の防止に取り組むNPO法人「となりのかいご」代表理事の川内潤さんは、「自分で直接介護をしようと思うと、離職につながりやすい。日常の介護は

よい」との助言を受け、介護疲れをいやするため、現在はショートステイ(短期入所)も利用している。

最近、介護者の集いに招かれて経験を語る機会を得た。「仕事を辞めて、社会とのつながりを失って寂しかったが、取り戻した気持ち」という。

職場やケアマネジャーに相談したり、介護サービスを増やしたりすれば会社を辞めない道があったかもしれない。「今ならそう思える。でも、すべてを一人で背負い、余裕を失って周りが見えなかった」と振り返る。

